プリントを用いた地域史学習の可能性について
―定期考査問題を利用した場合―

斉藤理*1，　北林健二*2

キーワード：地域学習 , 高等学校日本史 , 高大連携

Abstract：

The advantage of the learning effect of local history learning is widely recognized. On the other hand, there is a current situation that is hard to be introduced into the learning scene of high school local history learning program. The results of the questionnaire for the teachers, I have shown that there is a feeling of resistance to one of its factors. This feeling of resistance is due to the size of the burden of time loss of teaching materials available and materials when carrimg out in the classroom , call his "impossible theory".

Therefore, the author of this paper was investigating the general-purpose model of paper learning. Paper learning, because well established in education as a method of easy to handle. The author attempt practice applying the technique to periodic examination scene a local history learning as one style of paper learning in this case study. The participants were 111 high-school students,grade 2 high-school.

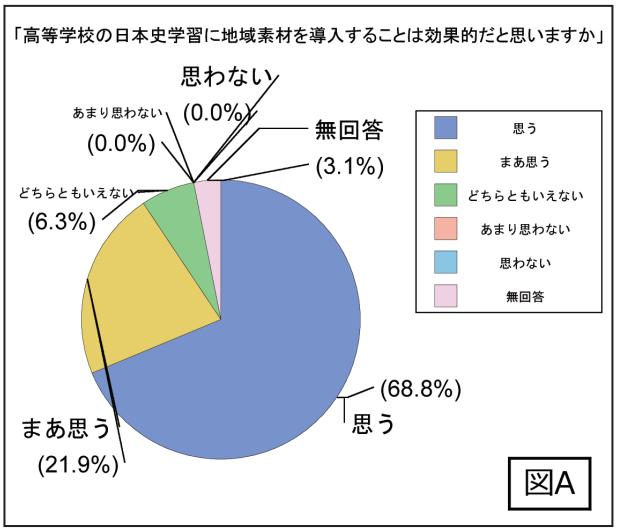
As a result, the height of the feasibility of this approach has been revealed. In addition, I found that this technique has a learning effect ambiguous.

Benefits of applying techniques on a periodic examination scene a local history learning,is not only to reduce the load on the teachers side. Learning effect is much higher for high school students. For example, this model stimulate the intellectual curiosity of high school students, and to direct to the history learning proactive.And this help the connection of Key Competencies,OECD called,what is the ability to be determined by the University. In addition, we can expect an effect to acquire a sense of self esteem to high school students.

１．本研究の背景、目的

１－１ 問題の所在

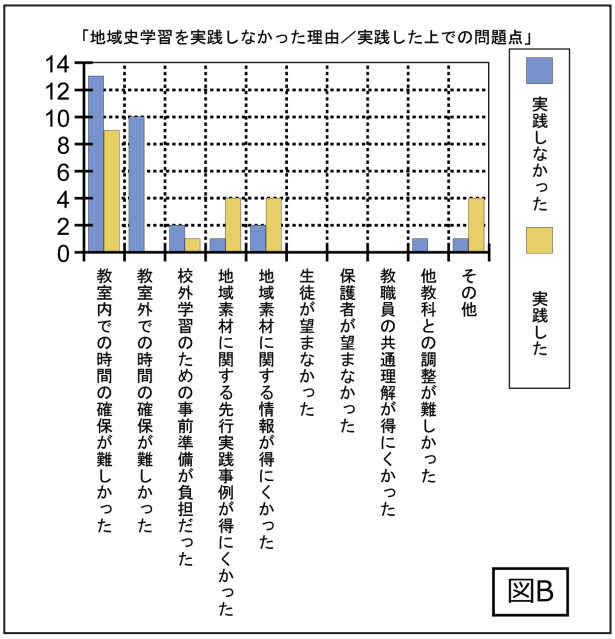
筆者は先に拙稿『地域学習に関する高大連携カリキュラムの可能性について[*1)]』において、歴史の授業を活性化する視点の１つとして「地域素材の教材化」がこれまでにしばしば提言されてきたにもかかわらず、高等学校の学習場面への導入が立ち後れている現状を指摘した。これは、地域素材を教材化する明確な手法が今なお示されていないためである。すなわち、地域史学習の導入を阻害しているものは、その学習効果への懐疑心ではなく、実現可能性の低さに対する抵抗感であることが指摘できる。このことは、次に示すアンケート調査結果[*2)]からも明らかである。



図A

*1 山口県立大学国際文化学部准教授 Assoc.Prof., Faculty of Intercultural Studies, Yamaguchi Prefectural University
*2 山口県総合企画部スポーツ・文化局県史編さん室明治維新部会専門研究員 , 修士（国際文化学）MA.,Intercultural Studies, Research Specialist in Yamaguchi Local History Compilation Secretariat

前頁（図A）は近隣５県の高等学校教員を対象として「高等学校の日本史学習に地域素材を導入することは効果的だと思いますか」と質問した結果を表にしたものである。それによると、「思う」との回答は68.8％あり、「まあ思う」との回答21.9％を合わせると90.7％にのぼっている（N=32）。また（図B）は地域史学習を実践しなかった教員に「実践しなかった理由」を、また実践した教員に「実践した上での問題点」を質問した結果をまとめたものである。それによると、実践しなかった者は約80％が〈教材利用時〉の時間確保の問題について指摘しており（N=15）、実践した者は時間確保に加えて〈教材作成時〉の問題を指摘している（N=17）。これらの調査結果からは、地域を素材とした歴史学習の学習効果が高等学校の教育現場において広く認識されている一方、〈教材利用時〉と〈教材作成時〉それぞれの負荷の大きさに対する抵抗感、すなわち「不可能論」とも呼べる意識が、地域を素材とした歴史学習の定着を阻害する要因の１つとなっていることを読み取ることができる。



以上のことから、地域を素材とした歴史学習を高等学校日本史の授業に導入するためには、実現可能性の高い手法の提言と普及により、こうした教育現場の抵抗感を払拭することが効果的であると言える。

１－２ 研究の目的

地域を素材とした歴史学習を高等学校の現場に導入する上で効果的な手法は次のａ～ｃの３点に集約することができる[3]。

ａフィールドワーク
ｂワークショップ形式の学習
ｃプリントを活用した主題学習

このうちａ（フィールドワーク）については筆者の研究によって、きわめて高い学習効果を確認することができた[4]。一方、高等学校の授業場面への導入を実現するためには、以下1)～3)の課題を解決する必要があることがわかった[5]。

1)教室内では完結できない空間的制約
2)準備や実践のための時間的制約
3)１人の授業者のみでは展開が難しい人的制約

またｂ（ワークショップ形式の学習）についても筆者の研究によって、一定水準の学習効果を確認できる一方、ａと同様の課題を持つことがわかった[6]。

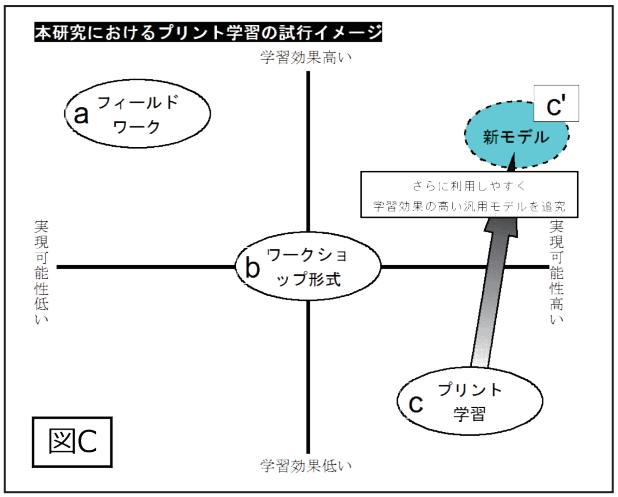
なおｃ（プリントを活用した主題学習）については、プリントに掲載する素材に着目して既存研究を総括すると、以下のような類型をあげることができる[7]。

①	地域の写真（遺跡・人物・民俗資料・記念碑等）を用いたもの
②	地域の金石文の拓本を用いたもの
③	地域の新聞記事を用いたもの
④	地域の遺跡の復元想像図を用いたもの
⑤	地域史の年表を用いたもの
⑥	地域の古文書の文面を活字で紹介して用いたもの
⑦	地域の墨書土器・木簡・古文書の写真を用いたもの
⑧	地域の研究成果を記した文献を用いたもの
⑨	地域の研究成果を記した数値データを用いたもの
⑩	地域の遺跡・史跡・歴史地図（新たに作成）を用いたもの
⑪	地域の古地図・古絵図(当時に作成)を用いたもの

しかしながら、これらの実践事例は先見性や先駆性を持つすぐれた実践であるだけに、汎用性の視点に十分に言及されず、レアケースにとどまっていることも指摘せざるを得ない。

そこで本稿では、扱いやすい手法として教育現場に定着しているｃのプリント学習の新しい手法を、筆者のこれまでの実践の蓄積の上に試行したい。

ここで、プリントを用いた地域史学習の手法については、その学習効果がａやｂに及ばないとされている[*8]が故に、前述の「不可能論」に加えて、不必要論を含む「消極論」に基づく指摘があると思われる。具体的には、生徒の混乱を招く、時間的損失が大きすぎる、受験とは関係がなく高校生も保護者も求めていないなどの論調が想定される。しかし反面、教科書の記載事項の具体例を身近な題材に見い出して手軽に紹介するなど、プリントを用いた地域史学習だからこそ実現できる学習効果も期待される。すなわち本研究はあくまでも中央史に背を向けたものではなく、地域史への関心を端緒として中央史への関心を深め、高校生のインセンティブを高めることを通して、知識としての歴史学習から能動的な歴史学習への接続に資する学習手法を提言しようとする立場である。この視点に立脚して、本研究ではプリント学習の扱いやすさの利点を最大限に生かしながら、どういった側面の学習効果を引き出す特色を持つのかを分析し、さらに、どう工夫すればバランスよく高校生の学習効果を確保することができるのかを検証したい（図C）。



１－３ 研究方法

本研究で着目したプリント学習のスタイルは、定期考査問題への地域素材の利用である。それは次の①～③の理由による。

①〈教材利用時〉の負荷の少なさが予想されること

定期考査問題を利用した地域史学習を、教育現場に広く普及定着しているプリント学習の延長線上にあるスタイルとしてとらえた。また、通常の定期考査の時間帯に実施されるため、シラバスを展開する上での進度への影響がない。

②〈教材作成時〉の負荷の少なさが予想されること

定期考査の一週間前には、高校生の考査準備のために部活動が制限されるなど、教師にとっても考査（教材）作成のための時間を確保しやすい勤務環境となる。

③ 学習効果が高いことが予想されること

考査時であるため、すべての高校生が短時間に集中して目を通すことになる。しかも正解を導くためには表層的に一瞥するのみならず、真剣に主題を読み取ることを要求される。

よって、次の手順で研究実践を行うこととした。

1）定期考査で扱う地域素材の選定
2）地域を素材とした日本史定期考査問題の作成と実施
3）実現可能性と学習効果の検証

なお、定期考査問題を利用した地域史学習の手法は佐古利南が積極的に行い、その有用性について1987年から1993年に至る一連の報告に詳述している[*9]。本研究はこの成果の上に、筆者がこれまで多様な学力を有する高校生を対象に地域史学習を実践してきた蓄積に基づいて、その実現可能性の高さと学習効果について検証するという趣旨のものである。

２．定期考査問題を利用した地域史学習の実践

２－１定期考査で扱う地域素材の選定

地域素材は、定期考査の出題範囲の中から、筆者が授業ノートに書き込んだメモをもとに選定した。選定にあたっては、次の①～③の３点を念頭に置き、赤妻古墳（山口県山口市赤妻町）を主題とすることとした。

① 細部の説明を省くことが難しく、授業時間中の活用には負荷の大きいもの

中央史との接点が明快で、かつ地方史の特異性を併せ持つが、ボリュームがあるために授業中に扱うことのできなかった素材を選んだ。赤妻古墳は５世紀のものと考えられ、多数の武具が副葬品として出土している。このことから、教科書に記載された中央史[*10]と地方史の接点を象徴的に伝えることができると考えた。一方、この古墳は、被葬者の１人が女性である可能性が高いこと、またその棺から呪術的な色彩の濃い副葬品が多数発見されたこと、さらに円墳であったことなど、４世紀の古墳の特徴[*11]

も伝えている。この特徴からは、歴史の叙述を地方史の個別性に立脚させる歴史学習の視点に端緒を与えることができると考えた。

② 具体的な事物に基づくもの

考査場面の限られた時間の中で、具象から抽象へと理解を促しながらの出題とするために、ビジュアル情報を掲載することができる素材を選んだ。赤妻古墳からは兜をかぶった武人的性格を持つ形象埴輪が出土しており、山口県立博物館に保存展示されていて、鮮明な画像が入手できる。

③ 高校生の生活圏にあるもの

高校生が能動的に学習しようとしたときに、即座に行動に移すことができる範囲にある素材を選んだ。赤妻古墳は湯田中学校の裏手に立地していて、この中学校出身者は受査する高校生の10.4％に相当する。

ところで赤妻古墳は遺跡としては現存しない。明治時代に土砂の採取で破壊され、消滅して、現在は案内板が立つのみである。しかしながら、そうした現状も、文化財の保存と今の生活を守ることとのバランスを考える上での格好の素材となると考えた。

２－２ 地域を素材とした日本史定期考査問題の作成と実施

２－２－１ 考査問題の作成

考査問題は、①実現可能性を高めることと、②学習効果を高めることの２点に留意して作成することとした[*12)]。

① 実現可能性を高める工夫

実現可能性については、とりわけ〈作成時〉の負荷に着目し、次のａ・ｂの工夫によって汎用性の確保を目指すこととした。

a 地域素材をリード文に利用する

地域の著名な文化財名や人名を歴史用語として解答させるものは、定期考査の出題としては適切ではない。したがって、地域素材はリード文に利用し、中央史との接点箇所を空欄とする完成式の出題とした。また、傍線を付して関連事項を問う連想式の出題とした。

この手法は汎用性が高いと言える。なぜなら、一度リード文を作成しておけば、翌年以降の考査で同様の考査範囲からの出題をする際、あるいは複数の教師で共有する際に、空欄部分や傍線部分を変更することによって、カスタマイズしやすい利点を持つためである。

b 会話文のスタイルで地域素材を提示する

上述ａのリード文は会話文のスタイルを用いて作成した。この手法は作成する側に次のような利点があり、汎用性が高いと言える。

・話題を振ることによって出題したい分野に無理なく移ることができ、問題の作成が容易になること
・トピックを絞ったリード文にはなりにくいため、範囲を鳥瞰した総合的・通史的な出題がしやすいこと
・近年のセンター試験の出題で必ず用いられるスタイルでもあり、広く普及した出題形式であること

さらにこの手法は高校生側の利点もある。日常生活場面を例にとりながら難解な素材を雑談風にわかりやすく提供でき、混乱を惹起しにくいためである。

② 学習効果を高める工夫

学習効果については、プリント学習の制約の中にありながらも、ワークショップ形式やフィールドワークのような高次の学習効果の確保を目指すこととした。

したがって、学校教育法に記された主体的に学習に取り組む態度を養うための３つの概念[*13)]に基づいて、次のA～Cの学習効果の目標を設定した。

A 基礎的な知識及び技能を促す
B 表現力その他の能力を高める
C 課題を解決するための思考力、判断力を育てる

〔学校教育法第30条２〕（傍線筆者）
前項の場合においては、生涯にわたり学習する基盤が培われるよう、A基礎的な知識及び技能を習得させるとともに、これらを活用してC課題を解決するために必要な思考力、判断力、B表現力その他の能力をはぐくみ、主体的に学習に取り組む態度を養うことに、特に意を用いなければならない。

なお、この３つの概念は相互に深い連関を持つ。そこで次のように読み替えながら、それぞれの評価軸において学習効果を高めるための具体的な工夫を施すこととした。

A 基礎的な知識及び技能を促す
…知識を広げ深みを与えるか→「**あたま**」を刺激するか
B 表現力その他の能力を高める
…知的好奇心を惹起するか→「**こころ**」を動かすか
C 課題を解決するための思考力､判断力を育てる
…行動変容を促すか→「**くらし**」を変えるか

A「**あたま**」を刺激する

知識に広がりや深みを与えるなど、高校生の知的側面にはたらきかける学習効果は、プリント学習の持つ特色の１つであると考えられる。

したがって作成にあたっては、教科書の内容を具体的に深め、知識中心に学んできた高校生が身近な文化財を再認識できるように構成した。その際、スモールヒストリーを提示することによる混乱を避けるために、常に中央史との接点を意識して作成することとした。

一方、地域史の特異性にも言及し、教科書の内容にコントラストを添えて、歴史の多様性を複眼的に考える契機を与えることができるように工夫した。

B「**こころ**」を動かす

知的好奇心を刺激するなど、高校生の心情的側面にはたらきかける学習効果は、ワークショップ形式の学習の持つ特色の１つである[*14)]。これをヒントに、作成にあたっては、具体的事物に基づいたビジュアルな情報に立脚した構成とし、高校生に間接的な体験を与えることを意識した。

C「**くらし**」を変える

学習者の行動変容を促す学習効果は、フィールドワークの持つ特色の１つである[*15)]。これをヒントに、作成にあたっては、高校生の生活圏の地図情報やアクセスしやすい参考文献などの発展的な情報を紹介することとし、高校生の能動的かつ直接的な体験に結びつけることができるように意識した。

２－２－２ 考査の実施

考査は、筆者が勤務していた山口県立山口中央高等学校において、通常の１学期期末考査の時間帯に実施した。

１）日　時：2012年７月４日（水）
２）形　式：問題文２枚（B4用紙両面刷り）に示された出題に対する解答を、別紙解答用紙（B4用紙片面刷り）に記入する（50分間）
３）受査者：日本史Ｂ選択者111名（高校２年生）

２－３ 実現可能性と学習効果の検証

定期考査問題を利用した地域史学習の実践は、どのような結果を導いたのであろうか。ここでは、1)実現可能性と2)学習効果の２つの視点からその結果を検証する。

２－３－１ 実現可能性の検証

①〈教材利用時〉の負荷の少なさ

１－３－①で述べたように、この地域史学習モデルはプリント学習スタイルの一手法として実践したため、フィールドワークやワークショップ形式と比べて、きわめて教材利用時の制約が少なかった。

ａ 空間的制約：教室内で完結できるか

プリントを用いて定期考査を実施するスタイルは、きわめて一般的であり、広く普及定着しているため、教室内で混乱なく生徒を着席させたまま実施できた。

ｂ 時間的制約：実践のための時間は確保できるか

定期考査の時間帯に実施されたため、通常の授業時間を割くことはなく、シラバス展開上の進度への影響はなかった。さらに、考査返却時の解答解説場面においても、多くの高校生は、後述（２－３－２Ａ）のように試験終了後に考査問題を再度読み直して不明点を解消する習慣がついているため、特別に詳細を解説するための時間を費やすことはなかった。

ｃ 人的制約：１人の授業者で展開できるか

勤務校では定期考査時は原則として１人の監督者がつき、出題者は各教室を巡回して受査者の質問への対応にあたることになっている。そのため、フィールドワークやワークショップ形式のように複数の引率者や進行役の支援を受ける必要はなかった。また、考査場面であるため、高校生の探究心や主体性における意識の濃淡は表面化しにくい条件下にあり、生徒掌握上の問題も生じなかった。

すなわち、地域史学習を定期考査場面へ応用する手法を実際に導入してみた結果、ａ 空間的 ｂ 時間

的 c 人的制約を最小限に抑えながら、高校生に地域史学習の機会を提供することができたと言える。

②〈教材作成時〉の負荷の少なさ

１－３－②で述べたように、定期考査前は教師にとっても時間を確保しやすい勤務シフトとなる。なお、（図D）の作業マップに示したように、考査作成に要する時間は通常の考査作成作業と比較して概ね同じである。すなわち、地域史学習を定期考査場面へ応用する手法を実際に導入してみた結果、教師側に特別な作業負担を強いる局面は見られなかった。

したがって上述の①②より、地域史学習を定期考査場面へ応用する手法は、①授業の進度にも②新教材の開発にも負われることなく*16)、高校生に地域史学習を提供することができる手法であると言える。

考査の作成・実施の作業マップ　図D

	編集作業	事務作業	実践	所要
6/20	地域素材の選定 構成細案の作成	写真・図表の入手		2時間
6/25 ~27	リード文の作成			3
6/29	設問の作成			2
7/ 2	校正/レイアウト 解答用紙作成			2
7/3	解答例作成 配点の決定	考査の印刷 配布準備		2
7/ 4			考査の実施	1
7/ 4 ~6		採点		6
7/11 ~18			考査返却／解説 アンケート調査	5
7/18		成績処理		1

生徒の生活圏を意識した
具体的事物による導入を企図した
中央史との接点に配意した
放課後と空き時間を活用
5クラス111人分

２－３－２学習効果の検証

本研究の主眼は地域を素材とした歴史学習の実現可能性の追究である。しかしながら学習効果の低い手法を提案したのでは、地域史学習の普及に資することはできない。したがって、この手法がどのような側面の学習効果を高めたかを分析して以下に述べたい。

アンケート調査は以下の方法で実施した。

1)アンケート調査の方法
・2012年７月11日（水）～18日（水）
・教室内で考査を返却し、解答解説後にアンケートを実施
・アンケート総数111件（有効アンケート数111件）

2)アンケート詳細

アンケート調査の目的

A「**あたま**」：地域史を扱った考査問題が知識や理解を促すかを調べる
B「**こころ**」：地域史を扱った考査問題が意欲や関心を高めるかを調べる
C「**くらし**」：地域史を扱った考査問題が思考力や判断力を育てるかを調べる
D「反　応」：考査場面を授業時間として捉えたこと を高校生はどう受け止めたかを調べる

アンケート項目

【質問１】山口市の歴史を題材にした考査問題に取り組んで、どう感じたか（スケール法）
① 見たことがない形式の問題で難しかったか
② いつもより興味深く考えることができたか
③ テストの場面だけど新しいことを知ることができたか

【質問２】テストで取り上げた赤妻古墳のことについて、どう感じたか（スケール法）
④ 実際に埴輪を見てみたいと思ったか
⑤ 赤妻古墳に行ってみたいと思ったか
⑥ 赤妻古墳について調べてみたいと思ったか
⑦ 赤妻町の住民にインタビューをしてみたいと思ったか
⑧ 他にも似た事例がないかを調べたいと思ったか
⑨ この歴史を知らない人に自分なりに説明できるか

【質問３】考査についての全般的な感想を自由記述（自由記述法）

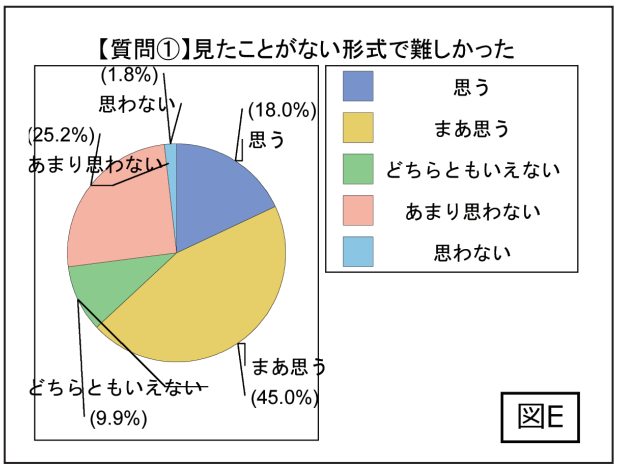
このアンケートの評価軸は、２－２－１②で考査問題の作成時に設定したA「**あたま**」B「**こころ**」C「**くらし**」の３つの概念とし、それぞれの調査目的に対して、次のように質問項目を設定した。

評価軸	A 知識・理解 「あたま」を刺激する	B 意欲・関心 「こころ」を動かす	C 思考・判断 「くらし」を変える
質問項目	① ⑨	②	④⑤⑥⑦⑧

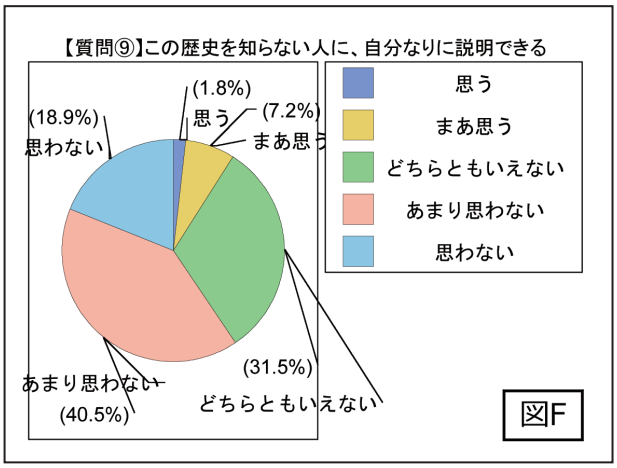
その結果、プリント学習の制約下にありながらも、予想を超えて望ましい効果を持ち得ることを確認することができた。なお、目的D「反応」はこの手法を受査者としての高校生がどう受け止めたかを調べるもので、質問③を対応させている。

A「**あたま**」を刺激する：知識に深みや広がりを与える効果

山口市の歴史を題材にした考査問題に取り組んで、質問①【見たことがない形式で難しかった】と「思う」とした高校生は20名あり、「まあ思う」50名を加えると全体の63.1％にのぼっている（N=111)（図E）。また、考査で取り上げた赤妻古墳について、質問⑨【この歴史を知らない人に、自分なりに説明できる】と「思う」とした高校生は２名のみで、「まあ思う」８名を加えても全体の９％にとどまった。それに対して「思わない」とした高校生は21名あり、「あまり思わない」45名を加えると全体の59.4％にのぼる（図F）。他者に説明することは高い学習効果を上げる活動としてよく知られている*17) が、考査問題に導入するのみでは、高校生に情報発信力を与えたり、自分なりの歴史像を形成させたりするまでの効果は得られないことがわかる。



図E



図F

したがって、このスケール法によるアンケート結果からは、地域史学習を定期考査場面へ応用する手法は、高校生の知識に深みや広がりを与える点では即効性を持つとは言えない手法であると考えられる。プリント学習のスタイルをとりながら、知的側面において十分な学習効果を得られないことは予想外であった。このことは、考査場面が制限時間内に解答用紙に正解を記入することを求められ、リード文を得心の行くまで読み解く時間的・精神的な余裕が与えられていないことが推測される。その証拠に高校生の自由記述欄には、知的側面に関する感想が次のように記されており、知り得たことを十分に自分の知識として消化できてはいないものの、新しい知識に触れたことに対する喜びがあったことを伝えている。

新たなことを知る喜びに関するもの

・テストで新しい発見があるっていうことはすごく良いことだと思います。普通のテストより楽しくできました。
・テストの中で新しく教わったことがたくさんありました。
・山口のことがけっこうたくさんあって、日ごろ自分から調べないと知ることができないことを知ることができた。テストの知識と郷土の知識が増えて一石二鳥。
・地元のことなのに結構知らないことがあるという風に感じました。この町にそういった歴史的なものがあるということを、このテストを通して初めて知ることができました。
・テストのときは少ししか読まなかったけど、家で見直したときに赤妻古墳のことがわかって嬉しかっ

た。

・ただ問題を解くだけではなくて、今まで知らなかった地元のことも知れて、おもしろいテストだなと思いました。
・見たことがない形式の問題だったので、初めは少し焦りましたが、問題を読みながら歴史の流れがわかってきたので、新しいことを学びつつ問題を解くことができました。
・問題文が会話形式だったのは、頭に入りやすくて良かったです。こんなに身近にたくさんの歴史的なものが残っていることは、初めてわかった気がします。
・山口にもいろいろな物が残っていて、こんなところにも古墳があるのかという新しい発見があって良かった。次もこの形式のテストを受けてみたい。
・自分の家の近くに古墳があるとは知りませんでした。
・身近な題材がテストに出たので、興味がわいたり、新しい発見があったりして、すごくためになった。
・山口県の中にもけっこう古墳があって、こんなにたくさんあるんだということと、知らなかったこと両方にびっくりしました。
・地元の歴史はあまり知る機会がなかったので、知れてよかったです。
・問題用紙を見た瞬間はびっくりしましたが、問題を解くと同時に新しいことを学ぶことができたのでよかったと思います。
・今回の考査の形式で次回も実施してほしい。理由は、新しい発見があるし、自分の意見の再確認につながるからです。

受験を意識したもの

・受験では何が出題されるかわからないので、こうした問題も経験して幅広く知識をつけておきたいです。
・変わった問題形式ではじめは戸惑ったけど、やりにくいとは思わなかった。問題を読んでいて新しいことも知れたし、印象的な出題だったので忘れにくいなって思う。
・今回のテスト問題は言葉を覚えるだけでは高得点は取れず、時代の流れまできちんと理解してないといけなかった。このようなテストは、これから受験勉強に使えると思いました。

設問の質に関するもの

・いつもとは形式の異なる考査でしたが、個人的にはその場で考える力などが問われ、普通に暗記しているだけでは点を取れないような形となっていた点について、とても新しく良いと感じました。
・思っていたよりも難しかった。頭では覚えていても、問題になると解けないものが多かった。
・とてもよい問題だったと思う。きちんと勉強している人にはわかる問題が多く出してあったので、解きがいがあった。
・テストの時は時間がないから、ところどころ飛ばして読もうと思いました。でも見直しの時に全体を読むことで、細かいところを見極めることができたのでよかったです。

なお、これらの感想には波線を付した箇所に見られるように、高校生が考査終了後に考査問題を再度読み直して不明点を解消する習慣がついていることが文章化されていて興味深い。

また次の感想からは、自分なりの歴史像を形成する歴史的思考力の萌芽を読み取ることができる。

・ただプリントを見て丸暗記するんじゃなくて、自分なりの考えとかも必要なんだとわかりました。次回に向けて勉強方法を変えてみようと思います。
・プリントや教科書をただ暗記しただけでは実際に問題として出たときにわからなくて焦りました。なので、次回からはきちんと１つ１つの理屈や流れをつかみながら覚えていきたいです。

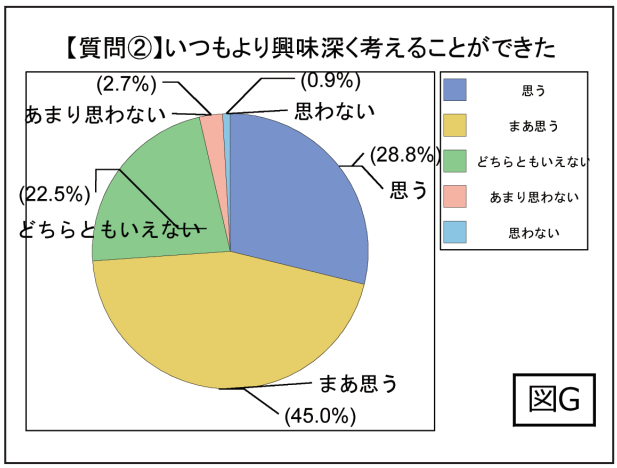
なお、自由記述欄に否定的な感想を記した高校生は12名で、全体の10.8％に過ぎない。具体的には次のような感想が記されている。

・問題文に地域史の細かい歴史が書いてあって、それをもとにメインの歴史を答えるものだったけど、テスト中に解読するのはとても難しい。やめてほしい。
・山口県の歴史を題材にした問題は解いたことがなかったので、難しく感じました。
・今回のような問題の形式は初めてだったので、難しく感じました。
・長い文章をのせるのは読むのに時間がかかるし、大変なのでやめてほしい。テスト中に山口の歴史について読んでも問題を解くことに必死で頭にはあまり入ってこないと思う。
・会話文は問題を解くことばかりに目が行ってしまい、傍線部などの必要部分しか読めませんでした。
・テスト中だったので、地元の歴史への興味よりも、問題に答えることで頭がいっぱいだった。

・会話文でだいぶ時間をとってしまった。テストじゃなかったら、もっと楽しく読めたな、と思った。
・先生と生徒の会話を楽しみながら熱中して読んでいたら、後ろの問題に時間がとれなくなって焦った。楽しかったけど、私からしたら苦手な感じだ。
・問題を見たときに、文字の多さに驚きました。地元の話をもとにした問題だったので、深く読んでいきたかったのですが。焦ってあまり読むことができませんでした。
・説明文を読むのに時間がかかって、最後の方の問題に時間がとれなくなった。
・地元の歴史を知ることについては良いことだと思うけど、テストを初めて見たときは量の多さにびっくりしました。
・その古墳の近くに行ったことも、見たこともないので、頭の中でイメージするのが難しかった。近くに住んでいる人にとっては有利だったのではないかと思った。

これらの否定的な感想の背景にあるものは、地域のスモールヒストリーを扱うことによる混乱を示す性質のものではない。むしろ「リード文の分量の多さ」と「暗記だけでは対応できない、初めて出会う形式の考えさせられる問題だから難しく感じた」という声が中心であり、上記 設問の質に関するもの と同列のものである。このことは逆説的には、地域史学習を定期考査場面へ応用する手法は、発問を通して高校生が情報発信できるように誘導するなどの展開に配意すれば、高校生の〈「**あたま**」を刺激する〉高い可能性を持つことを示唆している。

B「**こころ**」を刺激する：知的好奇心を惹起する効果



図G

山口市の歴史を題材とした考査問題に取り組んで、質問②【いつもより興味深く考えることができた】と「思う」とした高校生は32名あり、「まあ思う」50名を加えると全体の73.8％にのぼっている（図G）。このことは、地域史学習を定期考査場面へ応用する手法が、高校生の知的好奇心を惹起する高い効果を持つことを端的に示している。

なお、高校生の自由記述欄には次のような感想が記されており、上記の効果を裏付けている。

・忘れかけていた、身近に貴重なものがあるということを思い出させてくれるいい機会だったと思います。
・地元の歴史を知る機会は今までほとんどなく、あっても上の空だったりすることが多かったので、反省した。
・湯田に住んでいるので興味深かったです。中学校のときは古墳があることを知らなかったので驚きました。
・考査に様々な写真などがプリントしてあって、中には私が初めて見る写真があったりもしたので、とても興味深かったです。
・見たことのない問題形式だったので難しかったけど、山口にはこんな歴史があるんだ！と思って、テスト中だったけどとても感心しました。
・問題は読むのが大変だったけど、友達が住んでいる家の近くの話だったので、興味がわく内容だった。
・山口県にも古墳があって、しかも自分たちが普通に住んでいる場所の近くで昔を感じることができるのはすごいと思いました。
・問題文は楽しく読むことができ、新しいことも知れました。何より、身近なところの話題なので興味を持ちながら読むことができました。
・湯田中学校の卒業生なのですが、学校の裏手に古墳があったことは一度も聞いたことがなく、テスト中にもかかわらず興味が先行し、楽しく考えながらテストを受けることができました。
・地域のことについての問題が出たのでびっくりしました。でも地域のことについて、今まで考えたことがなかったので、よい機会でした。
・山口市の歴史が題材だったため、答えを迷うところがあった。でも山口のことを知ることができたり、歴史を身近に感じることができたのでよかった。
・初めての形式だったので最初は驚いたけれど、会話調だったので楽しみながら読むことができた。昔、

湯田に住んでいたので、自分の住んでいた近くに古墳があったことを知り、なんだか誇らしいような気持ちになった。

・テストを受けながら山口の歴史を知ることができてよかった。テストなのにおもしろかった！

・身近な歴史が話題になっていましたが、私はもともと興味がなかったことなので、知らないことばかりでした。だから読み進めながら「へぇ～」と思うことがいくつもありました。

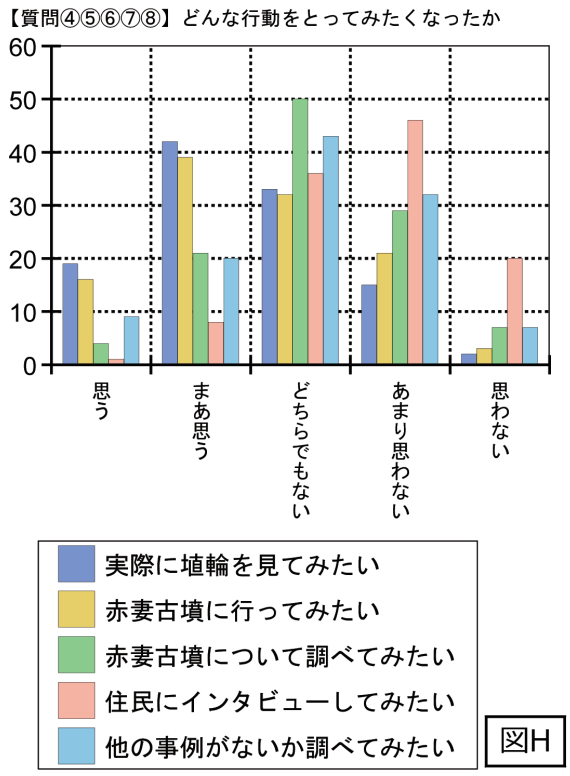
・問題を解くのに多くの時間を使ったが、初めてこういう地域のことを考えたので、新鮮な経験をした。

これらの自由記述欄からも、地域史学習を定期考査場面へ応用する手法は、高校生の知的好奇心を刺激し、意欲や関心を高めるといった〈「**こころ**」を動かす〉高い効果を持つことを読み取ることができる。

C「**くらし**」を変える：行動変容を促す効果

考査で赤妻古墳を取り上げ、高校生の行動の変容を調べたところ、実際の行動に移してみたいと回答した高校生は（図H）のように総じて少なく、直接体験を促す効果は低かったと言わざるを得ない。質問④～⑧は行動の能動性を次第に強めた評価軸を設定したものであるが、質問④【実際に埴輪を見てみたい】と「思う」とした者が19名あり、「まあ思う」42名を加えると全体の55.0％にのぼる一方、質問⑦【赤妻町の住民にインタビューしてみたい】と「思う」とした高校生は１名のみで、「まあ思う」８名を加えても全体の8.1％にとどまった。また質問⑥【赤妻古墳について調べてみたい】質問⑧【他にも似た事例がないかを調べてみたい】と「思う」と回答した高校生もそれぞれ４名、９名のみであった。これらの調査結果は、〈見る〉レベルの行動には興味を示す一方、他者と交流するコミュニケーション・スキルを要求される〈インタビュー〉という能動的活動に対して自信を持てない高校生像や、書籍を通した文献調査などの「調べ学習」に積極的な意欲を示さない高校生像の一端を見ることができる。なお、「思う」とした回答が比較的多かった、質問④【実際に埴輪を見てみたい】質問⑤【赤妻古墳に行ってみたい】についても高い積極性を示すものではなく、後述の自由記述欄を読むと「機会があれば」の水準にとどまっていることがわかる。

このアンケート結果は、地域史学習を定期考査場面へ応用する手法では、直接体験に結びつけるなど、高校生の行動変容を促すことに対する即時的な効果は得難いことを示している。



図H

一方、自由記述欄には次のような感想が記されており、高校生に内在するエネルギーの高さを伝えている。

行ってみたい／見てみたい

・案外近くにこういうものがあるんだなとびっくりした。実際に見てみたい。

・自分の知らない古墳についての記事があってとても興味深かったです。私が住んでいる身の回りには、多くの歴史が眠っているんだなあとい思いました。実際に、山口にある古墳をいくつか見てみたいとも思いました。

・家が赤妻町のすぐ近くなので、赤妻古墳を実際に見てみたいと思いました。

・テスト中に文章を読んで赤妻古墳が家のすぐ近くにあることが書いてあって、全然知らなかったので、今度見てみたいなと思った。

調べてみたい

・今回出てきた赤妻に祖母の家があるので、今度祖母に聞いてみたいと思った。

・地元のことをテストに出してもらったので、地元の歴史について考えることができました。次は、自分で地元の歴史について調べたいと思いました。
・見たことのない問題形式だったので難しかったけど、山口にはこんな歴史があるんだ！と思って、テスト中だったけどとても感心しました。ひまがあったら山口の歴史についてたくさん調べてみたいと思います。
・山口の古墳からも出土品があるというのは初めて知りました。赤妻町はそんなに遠い場所でもないので、何だか親しみを感じてしまいました。赤妻古墳について何か少しでも調べてみたいと思いました。
・私が住んでいる近くのことも調べてみたいと思った（国衙趾や天満宮古墳とかたくさんあるので）。

これらの自由記述欄からは、きっかけさえ与えられれば「直接体験してみたい」という高校生の気持ちの高まりを読み取ることができる。また、興味の対象は考査で取り上げた題材のみならず、高校生の生活する地域に残された他の文化財へも波及していることがわかる。こうした発展的欲求に対しては、下記ａ～ｄの情報を問題文中に掲載するなど、高校生の能動的な行動に繋がる動機付けを図る工夫が考えられる。

a 詳細な博物館情報
b 詳細な地図情報
c 現地の写真情報
d 現地の出土品データ

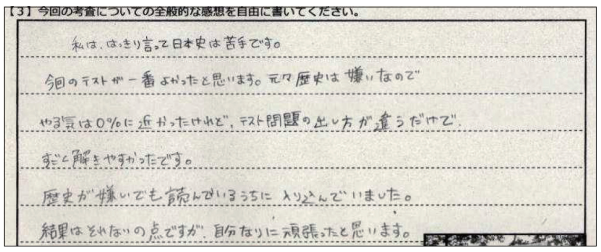
しかしながら、情報を提供するのみで高校生の行動変容を座して待つのでは、消極的に過ぎると言わざるを得ない。したがって、上述の高校生の発展的要求の存在は、彼らの能動性を醸成するために、階層的な地域史学習プランを策定する必要性があることを暗示していると読み取るべきであろう。すなわち、定期考査場面への応用といった単発的な実践ではなく、日頃の授業の中で日常的・段階的に地域史学習を扱うことのできる別のアプローチの必要性を示唆している。具体的には、見学レベルからインタビューへ、更には高校生自身が地域のガイド役になるなど、深化の過程を示したカリキュラムなどを展望することができよう。

したがって以上のことから、定期考査問題を利用した地域史学習を導入した場合の学習効果は、次のようにまとめることができる。

評価軸	A 知識・理解 「あたま」を刺激する	B 意欲・関心 「こころ」を動かす	C 思考・判断 「くらし」を変える
評　価	○	◎	△

すなわち、この手法はとりわけ高校生の知的好奇心を惹起する効果が高いことが確認できた。このことは、当該手法が地域史学習の機会を確実に高校生に提供できていることを示すものであり、考査場面も新たなことを学ぶ日本史の授業時間として捉え直すことを再認識する意義を改めて示している。

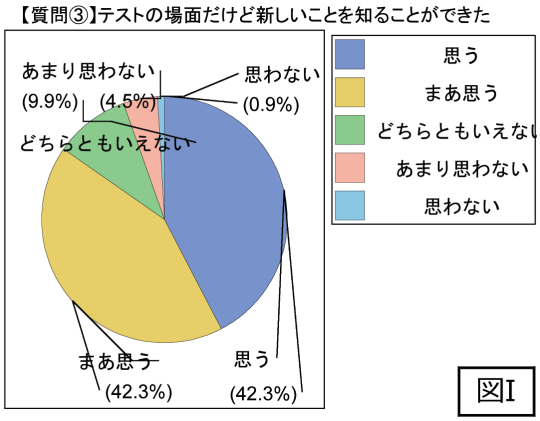
なお、このアンケート調査は無記名で行われたため、日本史の成績下位層に対する学習意欲や成績向上に関するデータ分析を行うことはできない。しかしながら、少なくとも高校生が生活する地域の歴史へ目を向けさせ、成果を手にするための１つの段階を踏ませている可能性を指摘することができる。次に示す感想は、当該手法と高校生のインセンティブ向上とを直截的に関連づけるものではないが、日本史を苦手とする者に対しても当該手法が有効であることを示す一例として捉えることができる。


【3】今回の考査についての全般的な感想を自由に書いてください。
私は、はっきり言って日本史は苦手です。
今回のテストが一番よかったと思います。元々歴史は嫌いなので
やる気は0%に近かったけれど、テスト問題の出し方が違うだけで、
すごく解きやすかったです。
歴史が嫌いでも頑張っているうちに入りこんでいました。
結果はそれなりの点ですが、自分なりに頑張ったと思います。

２－３－３ 受査者としての高校生の反応

山口市の歴史を題材とした考査問題に取り組んで、質問③【テストの場面だけど新しいことを知ることができた】と「思う」と回答した高校生は47名、「まあ思う」と回答した高校生47名を加えると全体の84.6％にのぼっている（図I）。ここからは、地域史学習を定期考査場面へ応用する手法が高校生からも肯定的に受容される手法であることを読み取ることができる。

なお、高校生の自由記述欄には次のような感想が記されていて、今後の展開可能性の高さを示唆している。



図I

楽しかったとするもの

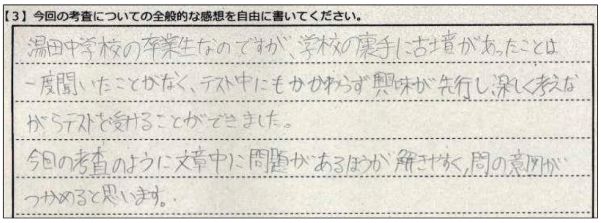
・確かに問題文は長く難しいものでしたが、地元の内容などが入っていて、読んでみるととても興味深いものでした。ただ問題文を作るのではなく、地元の内容を盛り込むだけで、テストにいつもとは違う楽しさがあったと思われます。これからもこのような問題を作っていってもらいたいです。
・身近な内容を題材にした問題だったので、楽しく試験を受けることができた。
・こういう形式は初めてだったけど、楽しく読むことができた。またやって！
・読んでいて楽しく、私は好きでした。
・問題を解くのが楽しかったです。
・絵や地図があって楽しかった。
・テストの形式が初めてだったので新鮮だった。
・少し発展的だと思った。難しい部分もあったけど、解いていて新しい発見もあり楽しかった。
・テストの形式が今まで経験したことがないようなもので少し戸惑ったけど、おもしろくて楽しかった。なんか先生らしい、と感じました。

取り組みやすかったとするもの

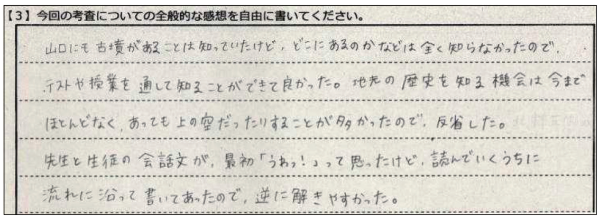
・私は、はっきり言って日本史は苦手です。もともと歴史は嫌いなので、やる気は０％に近かったけれど、テストの問題の出し方が違うだけですごく解きやすかったです。歴史が嫌いでも、読んでいるうちに入り込んでいました。今回のテストが一番良かったと思います。
・今までとは違ってとても新鮮味を感じ、テストに集中することができました。最後まで飽きることなくできてよかったです。
・いつもとは違う形式で新たに知ることもできたし、普通の問題よりは興味を持って考えることができました。
・今までにない問題形式だったが、地元という事もあり、興味深くテストにのぞむことができた。
・問題というより、会話を楽しみながらできたので、テストだけど気軽にできたような感じがします。
・今回のようなテストは今まで験したことがなかったので、少し難しく感じたが、落ち着いてやれば結構問題が解けたのでよかった。
・今までとは全く違うテスト形式だったから、いつもより真剣に考えることができた。
・全体的に難しかったけれど、解答がわかったときの達成感が違いました。

こうした反応は筆者にとってはきわめて印象的であった。書店に並ぶ問題集を開いて出題傾向を探ったり、学習塾で予想問題に取り組みながら対策を立てれば解ける類型化された出題の方が高校生は得点しやすいため、地域史を主題とした出題は概ね不評であろうと予想していたためである。

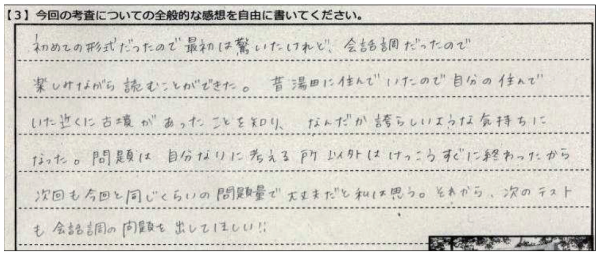
これらの高校生の感想は、彼らが具体的に待ち望んでいた地域史学習のスタイルに、教師側がやっと応じてくれたという「満足」を示すものではない。むしろ、高校生が新しい地域史学習のスタイルを提案され、思いがけず知的好奇心を刺激されたこと、思い入れをもって考査に取り組めたことに対する「喜び」を示していると捉えることができる。このことから、本研究において試行実践した手法は、高校生の潜在的な需要を掘り起こすと言うよりはむしろ、高校生の「ニーズを創る」取り組みであると考えられる。


【3】今回の考査についての全般的な感想を自由に書いてください。

湯田中学校の卒業生なのですが、学校の裏手に古墳があったことは一度聞いたことがなく、テスト中にもかかわらず興味が先行し、楽しく考えながらテストを受けることができました。
今回の考査のように文章中に問題があるほうが解きやすく、問の意図がつかめると思います。


【3】今回の考査についての全般的な感想を自由に書いてください。

山口にも古墳があることは知っていたけど、どこにあるのかなどは全く知らなかったので、テストや授業を通して知ることができて良かった。地元の歴史を知る機会は今までほとんどなく、あっても上の空だったりすることが多かったので、反省した。
先生と生徒の会話文が、最初「うわっ！」って思ったけど、読んでいくうちに流れに沿って書いてあったので、逆に解きやすかった。


【3】今回の考査についての全般的な感想を自由に書いてください。

初めての形式だったので最初は驚いたけれど、会話調だったので楽しみながら読むことができた。昔湯田に住んでいたので自分の住んでいた近くに古墳があったことを知り、なんだか誇らしいような気持ちになった。問題は自分なりに考える所以外はけっこうすぐに終わったから次回も今回と同じくらいの問題量でよいまだと私は思う。それから、次のテストも会話調の問題を出してほしい!!

したがって以上のことから、定期考査問題を利用した地域史学習は、以下の効果を持つことが確認できる。

① 実現可能性がきわめて高いこと
② 知的好奇心を惹起する学習効果を持つこと
③ 高校生の地域史学習のニーズを創ること

３．まとめと提言

３－１　地域史学習を定期考査場面へ応用する手法の有益性

本稿では１で、地域を素材とした歴史学習は高等学校の学習場面への導入が立ち後れており、その要因が実現可能性の低さにある事を指摘した。さらに、この課題を解決するためには汎用性の高いプリント学習手法の提案が必要であることを述べた。

また２では定期考査問題を利用した地域史学習の試行実践を通して、この手法がきわめて高い実現可能性と知的好奇心を惹起する学習効果を持つのみならず、高校生に歓迎される学習スタイルであることを明らかにした。

以上のことから本研究は、地域を素材とした歴史学習を高等学校において実現するための一手法を明確に示すことができたと考えている。

地域を素材とした歴史学習の高等学校の学習場面への導入が進めば、文化の発信源としての学校の役割を拡充する、地域住民に対して伝統的なものを保持する誇りを与えることに繋がるなど、学校や地域にとっても多義的な効果をもたらす。ここでは、とりわけ高校生が享受することのできる効果に着目して論じたい。

すでに100年前に「旧教育は、これを要約すれば、重力の中心が子どもたち以外にあるという一言につきる」（John Dewey:1899）と指摘されているように、高校生を主役とした授業の再構築は決して新しい課題ではない。地域史学習の導入が高校生にもたらす効果は以下の1）～3）に集約することができるが、その意味では100年前から求められている「新しい教育」に属する学習形態の１つであると言える。

1）　豊かな歴史認識を育てる効果
2）　基礎的能力を育成する効果
3）　自己有用感を獲得させる効果

３－１－１ 豊かな歴史認識を育てる効果

２－３－１Ｂに示したように、地域史学習を定期考査場面へ応用する手法は、高校生の知的好奇心を惹起して〈「**こころ**」を動かす〉高い効果を持っている。向山洋一が「成果を数字で残すための唯一の方法は『積み重ねる力』である。（中略）この力を得るとき、欠かせない条件が１つある。それは『好きであること』。（中略）われわれは、ともすれば途中でやめるときに『才能』という言い訳を使いたくなる。そういうことは、これからも何度も訪れるだろうが、才能がないのではない。そのことに対する愛情がないのだ[*18]」と述べているように、郷土愛に立脚した学習姿勢は高度な学習レディネスを前提とせずとも、高校生を難解で複雑な地域素材の読み解きへと無理なく向かわせる。このことは、地域を愛する心を育てることが高校生の豊かな歴史認識に繋がる可能性を持つことを示唆している。

たとえば、後日の調査[*19]では「地域史を扱った出題に対して、どのようなことを感じたか」との質問に対して、成績上位層の高校生には次のような回答が見られた（上位８％から抄出）（N=111）。

・私は歴史を途切れ途切れで勉強していましたが、改めて歴史は続いている、流れがあるのだなと思いとても楽しかったです。
・いろんなところで話がつながっていって、歴史はつながっているのだと感じた。おもしろかった。
・今、自分が生きているこの土地でもさまざまな歴史があり、これからもこの歴史を受け継がせていきたい。
・授業の中だけでは知り尽くせないほど、色々な豆知識もあって、歴史（日本史）は面白いと改めて感じた。

また「地域史を扱った出題に対して、どのようなことをやってみようと思ったか」との質問に対して、成績上位層の高校生には次のような回答が見られた（上位17％から抄出）。

・山口という自分たちが住んでいる場所で、どんなこ

とがあったのかを調べてみたい。歴史背景を学んだ上で地域を見てみると、変わった視点で見ることができて、楽しそうに思ったから。

・自分が住んでいる土地の歴史や出来事を調べ、もっと知れるように、いろんな方法で調べたい。そうすれば、調べて学んだことをいろんな人に教えたり、自分の新しい発見になるから。

・山口県が奈良～平安にかけて、都とどのようにつながりがあったかをもっと調べたい。山口県がこんなに歴史に関係しているとは思わなかったので、とても興味を持ったから。

・ただ暗記するのではなく、１つ１つに深い知識を入れていきたい。暗記しやすくなるし、自分にとってプラスになるから。

・地域の歴史について書いてあったので、自分でもっと詳しく調べたいと思った。地域の歴史を知ることで、この土地をもっと好きになることができそうだから。

・自分が住んでいるところの身近な歴史を調べてみる。今回のテストで、長登銅山が出てきましたが、ほとんど知らなかったので、自分の地域の歴史くらいは知っておきたいと思ったから。

これらの回答例からは、地域史学習についての興味や関心が深い高校生は、概して中央史への問題意識も高く、その理解には複眼的な深みや広がりがあることを読み取ることができる。「流れがある」「つながっている」という上記の感想に見られるように、定期考査場面を利用した地域史学習は、こうした高校生に対して、断片として記憶された抽象的な教科書の情報に有機的な連関を与え、自らの歴史像を形成させる上での格好の支援機会となった。すなわち地域の素材が地域を超えて、また時代を超えて中央史と連関していることに気付き、そこに通底する共通項をもとにしながら、あるいは特異性に着目しながら、自らが歴史を連関させたり編集したり、あるいは新たに発掘したりする面白さに高校生を出会わせることができたと考えている。

３－１－２ 基礎的能力を育成する効果

２－２－１①で述べたように、地域を素材とした歴史学習はA「**あたま**」B「**こころ**」C「**くらし**」の３つの評価軸に望ましい学習効果をもたらす可能性を持っている。しかしながら、実現可能性の低さに対する抵抗感が地域史学習の導入を阻んでいたのでは、そのとば口に立つことさえ困難である。したがって、地域史学習を定期考査場面へ応用する手法には、高校生に上記３つの効果をもたらす橋渡し役としての役割を期待することができる。

これらの効果を、社会人に求められる資質に着目して捉え直すと、次のような能力の育成に換言することができる。

A「**あたま**」：獲得した知識や情報を用いて問題解決のための最善解を導く能力

B「**こころ**」：社会事象を大局的に俯瞰して自ら課題を発見する能力

C「**くらし**」：他者との交流を通じて問題解決のための行動を起こす能力

上記の能力は、文部科学省の示す〈基礎的能力[*20)]〉に重ねて捉えることができ、教育行政の側面からも、その価値が広く認められる能力であると言える。また、これらの能力はOECDが主唱するKey Competencies（主要能力）の概念にも通じるばかりでなく、大学生に求められている能力でもある[*21)]。すなわち国内の制度論からも国際的な世論からも普遍的な価値が認められた能力であるのみならず、将来的な学びの場面でも求められる能力である。

このように地域史学習を通して育成される積極性、多面的視野、観察力、交流力などの資質はこれからの時代に求められる基礎的・汎用的能力であると言えよう。

３－１－３自己有用感を獲得させる効果

定期考査問題の場面では、高校生は否応なしに地域史学習に向かわざるを得ない。その結果、２－３－３で「楽しかった」とあるように、短時間に集中して身近なテーマを読み解かせる作業が高校生のニーズを創る機会となっている。さらに２－３－２Cで示したように、考査で扱ったことを契機として「直接体験してみたい」とする高校生も見られた。このように、地域史学習を定期考査場面へ応用する手法は高校生の背中を押して、その意識を地域の文化財へと向かわせている。

若い世代が地域の文化財に関心を寄せることは、地域の人の喜びに繋がる[*22)]。この喜びは若い世代との「交流そのもの」によってもたらされるものであり、彼らが何か価値のあることをした〈doing〉

に対する評価ではない。すなわち、若い世代がただそこにいる〈being〉に対する評価である。このことは、高校生の地域史学習が次の①～③の段階を経て展開することを暗示している。

① 当初は、利他的な意識を持ちつつ地域を素材とした歴史学習に取り組む

② やがて地域社会の喜びの声に触れ、交流そのものが地域貢献に繋がっていることを知る

③ 自分自身の価値肯定に支えられて他者を受容し始め、主体的な地域学習に臨むようになる

このように地域を素材とした歴史学習の高等学校の学習場面への導入が進めば、高校生の利己的な効果に昇華される可能性を持つことが考えられる[23]。すなわち、当該手法は自己有用感を獲得させ、その体験が再び地域史学習に向かわせるという善循環を始動させ、高校生のメンタルヘルスを支えるとともに、持続的に文化財を愛する心の基盤形成に端緒を与えるものと考えられる。

３－２今後の課題

上述のように本研究においては、地域史学習を定期考査場面へ応用する手法が有益であることを確認することができた。なお、継続的に実践していく上で、以下ａ～ｃの問題点があることも認めた。

a 教師の力量への依存

本研究における考査問題の紙面は、高等学校の教師が中核となって地域社会や専門機関の研究成果等、入手しうる様々な情報を集約して完成される。その意味では多くの人々の知的資源に立脚した地域史学習の手法である。しかしながら、個々に編集された地域素材を１つのストーリーとしてまとめる作業は個々の教師の力量に依存する部分が多く、すべての教師に開かれた手法であるとは言いがたい。

b 頻度と現場性の不足

本来であれば地域史学習は、あらゆる教育の機会を通じて、とりわけ高校生が多くの時間を過ごす日々の授業の中に日常的に導入されるべきであろう。その中でフィールドワークにより、あるいは多様なメディアを活用しながら多元的に展開されることが理想である。しかしながら年に数回の定期考査時のみの実践では、打ち上げ花火的となってしまい、高校生の本質的な行動変容には結びつけにくい。

c 情報交換のしくみの形骸化

学校教育に携わる者が作成して蓄積してきた地域素材に関する教材は、それを集約すれば貴重な教育資源になる。こうした個々の研究成果をWEB上で共有し、地域内・地域間で連携して教材開発ができるネットワークが構築されれば、きわめて有効な共有財産となるであろう。上述ａの問題点も、豊富な実践事例が共有されていれば解決できる性格のものである。しかしながら、地域史学習を協働して構築するしくみは過渡期にあり、実効性のある視点は今のところ見ることができない。

３－３ 提言

２－３－３で指摘したように、地域史学習を定期考査場面へ応用する手法は、高校生のニーズを創る効果を持っている。しかしながら、こうした需要に対して、上述３－２で述べたａ～ｃの課題があるために、学校サイドに発展的なサポート体制が整っていない現状も指摘せざるを得ない。

そこで筆者は現在、上記ａ～ｃの課題に対する１つの解を導くために、高大連携を基軸とした新しいプリント学習のモデルを模索している。構想は以下の通りである。

a' 教師の力量への依存を緩和するために

地域素材の教材化を個々の教師の孤独な作業に委ねる必然性はない。そこで、教材を作成する人的資源として大学生を想定し、成果物を高等学校へ提供するしくみができないかと考えている。これは単なる労力の肩代わりという側面のみならず、高校生に感性が近い大学生の手によって、教師が最善であると信じている認知スタイルとは違った切り口でリフレーミングされた歴史認識を提供するという効果も期待している[24]。

b' 頻度と現場性の不足を補うために

地域史学習を日々の授業に日常的に導入するためには、豊富なコンテンツが、しかも10分後の授業ですぐに活用できる簡便なフォーマットで提供されることが望ましい。これを実現するために、大学生とともに高校生の生活圏を歩き、多種多様なコンテンツをデータベースとして揃えることを目指している。

c' 情報交換のしくみを革新するために

現在、高等学校教員には１人１台のパソコンが支給され、しかも常時ネット接続されている。教育関連のホームページも充実し、さらにSNSを利用した

情報交換も普及しつつある。近年、学校への教育関係者を取り巻く情報ネットワーク環境は大きく様変わりしている。そのような時代にあって、教育者の個々の取り組みを相互に情報交換するしくみだけが動脈硬化を起こして立ち後れていることは看過できない問題として指摘せざるを得ない。そこでSNSに通じた大学生の力を借りつつ、学校現場における情報交換の次世代モデルを模索したいと考えている。

これら上記の新しい地域史学習モデルの詳細については、別稿で述べたい。

本研究では、定期考査という管理的・客観的・合理的で砂を噛むような学習ツールの中に、あえて身近な地域素材という個性的・主観的・体験的で人間味豊かなテーマを扱った。一方、高校生は考査場面で正解を導くために、地域素材をこぼれ話的な雑談として流し読みするのではなく、地域史と中央史との連関を強く意識しながら慎重に取り組んだ。したがって定期考査場面に地域史学習を応用する手法は、日常的な地域史学習の場面では顕在化しにくい高校生の意識構造の一面を明らかにする可能性を見い出すことができたと言える。しかもこの蛮勇とも呼べる試行実践に対して、高校生は喜びや驚きを示している。このことは本研究の成果の１つとして特筆できるであろう。

「暗記中心の学力一辺倒の入学試験でない形を検討してもらいたい」

この言葉は 2013 年 11 月 1 日、政府の教育再生実行会議が大学入試改革の提言に盛り込んだ「達成度テスト（仮称）」について、下村文部科学大臣が閣議後の記者会見で話した言葉である。

「従来の教科書が多くの史実をただ断片的に羅列し、そのため歴史の勉強とは暗記することだと誤り伝えられているが（中略）歴史を考える学問とすべきだ」

この言葉はポツダム宣言受諾のわずか３か月後、1945年11月12月に開催された歴史学研究会における国史教育再検討座談会において指摘された言葉の記録である[25]。

地域を素材とした歴史学習は高校生の主体的な学習姿勢を喚起する起爆剤であるとされながら70年近く顧みられなかった現状がある。本研究がこうした現状に対する一条の光になることを願っている。

平成24年度１学期末考査　　20120704

２年 日本史Ｂ考査問題

解答に際しては適切な漢字を用いること。ひらがな書は減点とする。

Ⅰ 次の教師と生徒の会話文を読んで空欄を適切な語句で埋め、以下の設問に答えよ。

伝赤妻古墳出土 人物埴輪

教師　これは何の写真だかわかるかい？

生徒A（ ア ）埴輪です。これは人物をかたどったものですね。

教師　そうだ。右の人物は、頭になにか被っているようだね。何だろうね？

生徒B　鉄製の兜が打ち込まれているように見えます。

教師　おそらくその通りだろう。それでは、何世紀頃に作られたものだと考えるかい？

Ｂ（ ア ）埴輪は中期～後期の古墳からの出土が多いと教わりました。さらに、この埴輪が（兜）を被った人物だとすると、軍事的な特色が感じられます。だから（ イ ）世紀のものだと思います。

教師　いい推理だ。

Ａ　どこの古墳から出土したものなんですか？

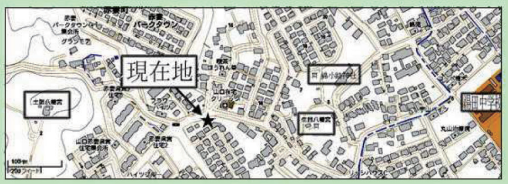
教師　詳しい出土状況は不明なのだが、赤妻古墳から発掘されたものと伝えられているんだ。

Ａ　あ……か……づ……ま……？……僕の電子辞書には載っていません。

Ｂ　……僕の日本史用語集にも載っていません。

教師　そうか。所在地は山口市赤妻町。湯田中学校の裏手だ。歩いて行ってみよう。

A/B　！！！



教師［現地で］このあたりだよ。あれが宝治八幡宮、こっちは鋤小路神社だ。

Ａ　マックスバリュ吉敷店の裏手には、土師八幡宮がありますね。そういえば、百済から渡来した人々の一部は、（ ウ ）部と呼ばれるセクションに属して埴輪を製作したことを思い出しました。

教師　その関連性については慎重に語らなければならないだろうね。だけど、近辺に埴輪を焼く技術集団が集まって住んでいた可能性はあるね。そうした（ ウ ）部のような技術集団――品部――のリーダーをつとめていた（ エ ）のような立場の者が、かつて人柱神として祀られていたと想像してみるのも楽しいね。

Ｂ　わずか半径300メートル足らずの地域に３つもの神社があるんですね。何だか、古墳と関係がありそうだなぁ。

教師　生目八幡宮は眼病平癒の信仰対象で、鋤小路神社は幕末に都落ちした七卿の1人の墓所らしい。これら3つの神社が赤妻古墳を取り巻くように立地していることを念頭において設立の経緯などを調べてみると、新しい発見があるかも知れないね。

Ａ　赤妻古墳から出土したのは埴輪だけなんですか？

教師　いや、全部で3つの石棺が発掘されていて、中から遺骸骨が2体と、兜・鎧・刀・鉾・鏃・鏡・貝類装飾品・勾玉・管玉・切子玉・櫛・針などが発見されている。これらの豊富な出土品は現在、東京国立博物館と山口県立博物館に分けて保管されているんだ。先ほどの埴輪も山口県立博物館で現物を見ることができる。

Ａ　ちょっと待ってください。前半の兜・鎧・刀……などの軍事的な副葬品は大和時代中期の典型と教わりました。けれども、後半の鏡・勾玉・管玉などの呪術的な副葬品は大和時代前期のものじゃないんですか？

教師　いいところに気がついたね。さっき、石棺が3つ発掘されたと言ったよね。実は、前半の軍事的な副葬品は1つめ・2つめの石棺からで、後半の呪術的な副葬品は3つめの石棺から見つかったんだ。

Ａ　櫛や針もですか？

教師　そのとおり。だから専門家は、3つめの石棺の被葬者は女性の可能性が高いと分析しているよ。中期の古墳という評価は変わらないんだけど、大和時代前期の呪術的な支配形態が残存していたことをうかがわせるね。

Ｂ　ところでどのあたりが古墳なんですか？

教師　今、立っているところだよ。残念ながら、盛り土はもう残っていないんだ。明治時代の土砂の採取で消滅してしまった。つまり、復元保存はされなかったんだ。

Ｂ　そうですか……とても残念です。

教師　そうだね。だけど、人間の生活の痕跡を遺跡と考えると、我々がここにつけた足跡も遺跡になるね。これらを全部保存することはできるかな？

Ｂ　たしかに現実的ではありませんね……そうか……僕たちがこうして暮らしているところも、明治時代の人が暮らしていたところも、古墳時代の人が暮らしていたところも、同じ舞台の上なのですよね。

教師　うん。時間の上では違う位置にいても、地図上の位置は変わらない。だからといって、今の私たちの生活を犠牲にして文化財の保存を最優先することもまた現実的とは言えない。歴史の記憶を守り伝えることと、現在の生活を守ること、その両者の折り合いをつけるためにどんな工夫ができるか、そのアイデアを出し合うことは、とても大切なことなんだ。

＊　　＊　　＊

Ａ　当時はどんな形をした古墳だったのかなあ。

Ｂ　決まってるじゃないか。さっき言ったように、埴輪とかその他の軍事的な出土品からみても（ イ ）世紀の古墳だろう？だったら大仙陵古墳と同じ（ オ ）墳だよ。

教師　そうだね。実に論理的だ。ところが現在のところ高さ5～6m、直径30～35mの円墳だと考えられているんだ。

Ｂ　え――!?だけどそれって、教科書とか図録に書いてあることと違いますよ！

教師　そこだ。我々は生きた歴史素材に接するとき、「習ったこととちがう」という戸惑いを覚えることが少なくない。だけどそこに、歴史の真実に迫るヒントが隠されているんだ。

そもそも、古墳とは何だったかな？

Ａ　大和時代、支配階級にあった人の墓です。仏教が伝来するより前の時代の権威の象徴としてつくられ、その規模は被葬者の勢力の大きさを物語っていると聞いたことがあります。

Ｂ　古墳の形や副葬品は意外と画一性を持っていて、中央政権と政治的に連合した証拠に（ オ ）墳のような特殊な形の古墳が築かれたのだともと教わりました。

教師　そうだ。いいぞ。もう少し推理を続けてみよう。

Ｂ（ オ ）墳は中央の大和政権と手を結んだ支配者の墓……ということは、撥破りの形を持つ古墳は……

Ａ　あっ！大和政権の支配に組み込まれなかった者の墓ですね！

教師　それも1つの推理として成り立つね。たしかに古墳時代中期は大和政権による全国統一が進む時期だ。とはいえ、ひとり残らず大和政権と手を結んだと考えるのは適切ではない。過渡期が存在したり、あるいは反逆者が現れた可能性もあるはずだね。山口市の中心部ではこの赤妻古墳のほかにも大寧・浄福寺・史山・猫山・霞尾山などが中期の古墳に比定されているが、そのいずれもが円墳なんだ。これはA君の言うように、一種のローカルな勢力が形成されていたことを想像させるね。

Ｂ　驚きですね。そうした者たちが、やがて団結して大和政権に反逆するようになるのでしょうか。

教師　地理的に近いところでは、大和時代後期の527年に筑紫（ カ ）磐井が（ キ ）と手を結んで、大和政権の6万人の遠征軍を撃退したできごとがあったね。当時の山口県でも似たような反逆があったとしても不思議はないね。ただ、残念ながら証拠が何も残っていないだけだ。そういえば赤妻古墳の1つめの石棺には造体を埋納した痕跡がみられないんだよ。もしかすると、国家の反逆者として、埋葬が認められなかったのかもしれないね。

Ａ山口市に（ オ ）墳はないんですか？

教師　新宮山1号墳・朝田13号古墳などが知られている。それに大内氷上古墳。これは農業試験場の北側の丘陵地に位置している。いずれも小さなもので、先に挙げた円墳にはほるかに及ばない。ちなみに、湯田温泉駅裏の宮田原地区には全長135mの（ オ ）墳形の地割りが残っているという説もある。仮にこれが痕跡だとすると、山口県下最大のものになるんだけど、即断は許されない。

Ａ　円墳が大きくて（ オ ）墳が小さい……これも教科書と違った歴史ですね。

教師　そうだね。当時の山口市は、いくつかのブロックに分かれて中小の有力者が割拠していたと推測する専門家もいるよ。大雑把に分けると（円墳派）と（（ オ ）墳派）だね。

Ｂ　山口市は、当時から有力者の集まる政治の中枢部だったかも知れないんですね。

教師　ところが、県下全体の古墳分布を見てみると、そうも言いにくいんだ。分布図を見てごらん。瀬戸内海や響灘の沿岸部に集中的につくられているようすがよくわかるね。その分布は当時、瀬戸内海がすでに重要な航路であったことを示唆している。表面をびっしりと（ ク ）に覆われた古墳が、朝日夕日に照らされて銀色に輝く姿は、海を通る船に権力者の存在を強くアピールしていたことだろうね。

（参考文献）森浩一編『日本の古墳』中央公論社（1979）
『山口県の古代遺跡Ⅱ 古墳編』古代遺跡調査会（1996）
山口県立博物館「考古解説プラス１」（2010）

1　百済　について。

① 三韓時代に百済は何と呼ばれる地域にあったか。

② 369年に百済王から倭王に贈られたとされる異形の刀が、大和政権の武器収蔵庫であった石上神宮に残っている。何とよばれる刀か。（漢字3文字）

③ 好太王碑文には「日本が百済を属国とした」という趣旨の文字が刻まれている。この碑は現在、中華人民共和国にあるが、当時は何という王朝にあったか。

④ 百済から伝来したと考えられる、灰色で硬質、水の浸みない土器は瀬戸物の起源とされている。この土器は何と呼ばれるか。

2『宋書倭国伝』には　大和時代中期　に倭の五王が使者を送った記録がある。

① 雄略天皇に比定されている興の弟は、倭の五王では何と表記されているか。

② ①の王が上表文で「征服した」と豪語している〈海北〉とはどこをさすか。

3　呪術的な支配　について。

① この支配は弥生期の巫女崇拝の流れを汲むものであると考えられる。この信仰をカタカナで何と呼ぶか。

② 呪術は大和時代の裁判にも用いられた。（盟神探湯）のフリガナを書きなさい。

③ 右の記事は（サンデー山口2012年6月29日から転載）、汚れをはらう儀式が現代にも残ることを伝えている。水を用いない儀式の1つである〈祓〉のフリガナを書きなさい。

市内各神社で
夏越の大祓
山口大神宮
古熊神社
仁壁神社
今八幡宮

4　仏教が伝来　した折りに、蘇我稲目と物部尾輿の間で起こった論争を何というか。

5　豪族とよばれた　有力者　が所有した私有民は、何と呼ばれたか。漢字で答えなさい。

6　大和時代後期　には地方における古墳は小型化し、かつ群れをなして営まれた。このような古墳を総称して何というか。

7　つぎの２つの文章のどちらか一方を選び、あなたが感じたことを書きなさい。（３点）

A
教師　うん。時間の上では違う位置にいても、地図上の位置は変わらない。だからといって、今の私たちの生活を犠牲にして文化財の保存を最優先することもまた現実的とは言えない。歴史の記憶を守り伝えることと、現在の生活を守ること、その両者の折り合いをつけるためにどんな工夫ができるか、そのアイデアを出し合うことは、とても大切なことなんだ。

B
教師　そこだ。我々は生きた歴史素材に接するとき、「習ったこととちがう」という戸惑いを覚えることが少なくない。だけどそこに、歴史の真実に迫るヒントが隠されているんだ。

Ⅱ 右の図を見て、以下の設問に答えなさい。

1 地図中のＡ～Ｃは、石器の材料として重視された、ある岩石の産地である。
① ある岩石とは何か。　② Ｃの地名を答えなさい。
③ 右上の図は何という打製石器の製作法を描いたものか。

2 地図中のＤは、装身具の原材料となった、ある鉱石の産地である。
① ある鉱石とは何か。　② Ｄの地名を答えなさい。

3 次の各文は、旧石器文化や縄文文化の遺跡・遺物の説明である。

a この地から出土した注口土器は、縄文晩期に東北地方を中心にすぐれた造形技術を持っていたことを表し、（ ア ）式土器と名付けられている。
b この地は、1877年にアメリカ人の動物学者（ イ ）によってわが国最初の発掘調査がされたところである。多くの貝殻とともに遺物が出土し大森貝塚と名付けられた。その後、わが国では約1600カ所の貝塚が見つかり、最大級は千葉県の（ ウ ）貝塚とされている。
c 化石人骨の研究から、人類は、（ エ ）→（ オ ）→旧人→新人の順に進化したと言われる。日本列島に暮らした人の骨はおもに石灰岩採掘場から見つかり、この地の浜北人骨や沖縄県の（ カ ）人骨などが知られているが、いずれも新人段階のものである。
d 1973年にこの地にある（ キ ）湖の湖底から打製石器と、朝鮮地方から渡ってきたらしい（ ク ）象の化石が見つかり、約２万年前の（ ケ ）世の日本に暮らしていた人々の生活を想像させている。
e 1949年、行商人でアマチュアの考古学者だった（ コ ）がこの地の赤土層から石器を発見したことから、日本の旧石器時代の研究が始まった。

① 文中の空欄に適切な語句を入れなさい。
② 各文中の この地 とは地図中のどこか。上の地図中①～⑧の番号で答えなさい。
③ 旧石器文化の研究が戦前・戦時中に禁じられていた理由を説明しなさい。（３点）

Ⅲ 右の記事を見て、以下の設問に答えなさい。（２０１０年５月３０日 朝日新聞）
（全問３点：２×７＝１４点）

1 縄文時代草創期につくられた土器は、世界最古級の土器であるといわれる。
① 長崎県泉福寺洞穴で見つかった土器には、どのような文様が刻まれていたか。次から１つ選んで記号で答えなさい。
ア 火炎文　イ 豆粒文　ウ 貝殻圧痕文　エ 縄文　オ 無文
② 土器がなければ作ることのできない、当時のメニューを１つ例示しなさい。
③ この時期に登場した、小動物を狩るための新たな狩猟道具は何か。

2 縄文前期の水面は今より3～5mも高かったと考えられている。この現象を何と呼ぶか。

3 縄文人の精神文化のうち、あらゆる自然物や自然現象に精霊が宿ると考える信仰をカタカナで何と呼ぶか。

4 この土偶の使途について、記事では豊産や豊穣と推理している。このほかにどのような使途が考えられるか。考えて例示しなさい。

5 狩猟・漁労・木の実の採集の３つの自然採集のうち、旧石器時代に活発に行われた痕跡が見つかっていないものはどれか。１つ選びなさい。

【秘密の辞書】
葺 葛 蘇 美 誉 駒 崇 柴
狗 岐 峻 陵 憤 墳 埴 屯
畿 幾 隋 魏 蜀 董 薹 著
著 管 雹 鬱 宋 床 筑 築
麗 羅 褒 難 雍 壅 應 饗
韓 輯 亀 蟲

縄文草創期 くびれ土偶

日本最古級、滋賀で出土

滋賀県文化財保護協会などは31日、同県東近江市の顔料原産地遺跡（相谷熊原遺跡）から縄文時代草創期（1万2千年前）とみられるこの土偶の体部を発見したと発表した。三重県で1998年に見つかった土偶とほぼ同時代のもので、ともに女性像で、今回の土偶のほうが現在サイズで小振りだが、乳房などの特徴がはっきりしている。竹花憲司撮影

縄文時代草創期

日本列島で人類の生活が始まったとみられる後期旧石器時代に続く時代。約1万5千年前から約1万年前とされる。最終氷期が過ぎ、温暖かくなり、人々は狩猟や漁労、木の実の採集などで暮らしていた。

土偶は高さ3・1㎝、最大幅2・7㎝で、重さ14・6㎏。胴体部分のみを表した造形で完全な形で出土した。底を平たくして仕切りを付けて自立できる造りは縄文中期（約5千年前）以前の土偶では例がないという。三重県松阪市の粥見井尻遺跡から出土した同時代の土偶（会長谷）

や腰のくびれが明確に表現されている。信仰や祭祀にかかわる遺物とみられ、旧石器時代から長期間の変換期の縄文人の精神文化の芽生えを考えるうえで貴重な発見という。

土偶は縄文時代草創期（約1万年前）に登場し、約1万年前の早期に盛んに作られたのではじまる。

土偶は今回出土した8個の半地下式の竪穴建物群のうち一つの周辺から見つかった。多大な労力をさいて建てられたとみられ、定住用の建物の可能性がある。

生活の様を伝えていた。（朝日新聞社）

なお、粥見井尻遺跡群は1973年に発見され、1979年に発掘調査が行われた。縄文時代の人々は移動生活を繰り返していたが、縄文草創期に竪穴建物が造られ、定住化が進んだとする研究もある。（加藤修子）

Ⅳ 次の史料を読んで、以下の設問に答えなさい。

A

夫れ楽浪海中に倭人有り。分れて（ ア ）余国と為る。歳時を以って来り、献見すと云う。

1（ ア ）にあてはまる適切な漢数字を入れなさい。

2 楽浪 郡を設置した武帝は、何という王朝の皇帝か。

B

建武中元二年、倭の奴国、貢を奉じて朝賀す。使人自ら大夫と称す。倭国の極南界なり。（ イ ）、賜うに印綬を以ってす。
安帝の永初元年、倭の国王帥升等、（ ウ ）百六十人を献じ、請見を願う。
桓・霊の間、倭国大いに乱れ、更々相攻伐して、歴年主なし。

3 文中空欄に適切な語句を入れなさい。（イは皇帝の名／ウは奴隷を表す言葉がはいる）

4 印 は現在、国宝として福岡市博物館に展示されている。
① この印が1784年に発見された地名を、漢字8文字で答えなさい。
② この印に刻まれている文字を、漢字5文字で答えなさい。

5 倭国大いに乱れ を裏付ける考古学的成果は、山口県にもある。14本の矢を射込まれて、顔部を石で叩き割られた人骨が出土した下関市豊北町の遺跡はどこか。

6 Ｂの史料の出典（史料文が掲載されている書物名）は何か。

C

景初二年六月、倭の女王、大夫難升米等を遣わして郡に詣り、天子に詣りて朝献せんことを求む……。

7 景初二年 は景初三年の誤りであることがわかっている。
① 景初三年とは、西暦何年か。
② 右の銅鏡は景初三年の銘を持ち、特別視されたと考えられている。同范鏡が多数見つかるこの銅鏡は何と呼ばれるか。

8 倭の女王 は約30ヶ国の連合国を率いていたとされるが、まだ日本を統一していたわけではない。
① 抗争があったとされる、南方の男王国の国名を記しなさい。
② 邪馬台国への道程は、この史料によるとどのように記してあるか。次の空欄に通語を入れなさい。

帯方郡→……【中略】……→不弥国→（ エ ）国→邪馬台国

③ 邪馬台国の位置について、史料に記された「方角」を誤りとする学説は何か。

9 この史料の著者は同時代に生きたとされ、史料の信頼性を高いものとしている。その著者の名を次から選んで記号で答えなさい。
ア 班固　イ 范曄　ウ 陳寿　エ 長寿王　オ 沈約

10 弥生時代の水稲耕作について。
① 次の各語句のうち、農業技術の進歩を表すものを１つ選んで記号で答えなさい。
ア 乾田　イ 木製農具　ウ 直播き　エ 穂首刈り　オ 竪杵　カ 貯蔵穴
② 初期の稲刈りには〈石包丁〉とよばれる石器が用いられた。形状を図示しなさい。

Ⅴ 次の史料を読んで、以下の設問に答えなさい。

一に曰く、和を以って貴しと為し、忤ふること無きを宗とせよ。
二に曰く、篤く（ ア ）を敬え。（ ア ）とは仏・法・僧なり。
三に曰く、詔を承りては必ず謹め。君をば則ち天とす。臣をば則ち地とす。
四に曰く、群卿百寮、（ イ ）を以って本となせ。其れ民を治むる本は要ず（ イ ）に在り。
八に曰く、群卿百寮、早く朝り晏く退でよ。
十二に曰く、国司・国造、百姓に斂ること勿れ。国に二君なく、民に両主なし。率土の兆民、王を以って主とす。
十七に曰く、夫れ事は独り断むべからず。必ず衆と論ふべし。

1 この史料は、その内容の進歩性と出典から偽作説が唱えられている。出典は何か。
2（ ア ）には仏教を表す言葉がはいる。
①（ ア ）にはいる適切な語句を答えなさい〈漢字２文字〉
② 仏教に通じていた聖徳太子は３つの経典の注釈書を著したとされる。現存最古の書籍となっている本は、何という経典について注釈したものか。
3（ イ ）には儒教の教えの１つがはいる。当時、儒教を知ることは最低限の外交マナーの１つでもあった。
①（ イ ）にはいる適切な語句を答えなさい〈漢字1文字〉
② 聖徳太子は儒教の教えを用いて12種の位階を採用した。最高位を何というか。
③ 儒教にも通じていた聖徳太子が隋に遣使した時、隋の皇帝が激怒したのはなぜか。（３点）
4 聖徳太子の新政には蘇我馬子が協力したと伝えられている。
① 蘇我馬子の画策によって592年に暗殺された天皇は誰か。（２点）
② 蘇我馬子が外護者となって創建された日本最初の本格的寺院（法興寺）の和風の呼称は何か。（２点）
③ 次に示したの伽藍配置の変遷の、（ ウ ）（ エ ）にあてはまる寺院名を記せ。
〈上記②〉式→四天王寺式→法隆寺式→（ ウ ）式→（ エ ）式→大安寺式〉（２点×２）
5 Ａは聖徳太子の等身大（178.8cm）と伝えられる。Ｂは国宝第１号である
① Ａの仏像は、法隆寺で長く秘仏とされていたものである。この像のベールを剝いだアメリカ人哲学者は誰か。（２点）
② Ａ・Ｂのような、飛鳥時代の仏像に共通する神秘的な装あを何と呼ぶか。（２点）
③ 法隆寺の列柱などにみられる、ギリシアの影響を受けた建築デザインは何とよばれるか。（２点）
④ Ｂの仏像がある都道府県名を答えよ。（２点）

Ａ 法隆寺夢殿救世観音像

Ｂ 広隆寺半跏思惟像

*１）山口県立大学学術情報第５号〔国際文化学部紀要 通巻第18号〕（2012）

*２）2012年３月に近隣５県（山口県、島根県、広島県、福岡県、愛媛県）の高等学校（公立／全日制／普通科／本校）地歴科教員を対象として質問紙を203校に郵送し、回答はファクスで回収した。アンケート総数32件（有効アンケート数32件）

*３）前掲,拙稿,pp.87-89

*４）前掲,拙稿,pp.92-95

*５）前掲,拙稿,p.96f

*６）拙稿「ワークショップ形式による地域史学習の可能性について」山口県立大学学術情報第６号〔国際文化学部紀要 通巻第19号〕（2013）p.52f

*７）前掲,拙稿（2012）,p.87

*８）佐藤照雄はその著書で、現場性を欠いた地域史学習の限界について次のように述べている。「文化財は、その対象も広く、したがって、学習方法も教室内での講義形式だけでは効果はあがらない」in 佐藤照雄『地域文化を探る－地域学習の課題と方法』教育出版センター（1986）p.40

*９）佐古利南「郷土史をどう扱うか－郷土史を素材にした定期試験問題撰－」;in「山口県高等学校教育研究大会日本史部会資料」（1988）など

*10）たとえば教科書には次のような記載がある。「中期になると、武器・武具の副葬品のなかに占める割合が高くなり、馬具なども加わって、被葬者の武人的性格が強まったことを示している」in石井進ほか『詳説日本史B』山川出版社p.24f

*11）たとえば教科書には次のような記載がある。「前期には、多量の銅鏡、碧玉製腕輪形宝器、鉄製の武器や農工具など呪術的色彩の強いものが多く、そのことから、この時期の古墳の被葬者、すなわち各地の首長たちが司祭者的な性格を持っていたことをうかがわせる」in石井進ほか『詳説日本史B』山川出版社p.24

*12）章末に第１学期末考査（2012年７月４日実施）を示しているので参照されたい。

*13）学校教育法第30条第２項（2007年６月改正）で、小学校の教育目標を達成するための学力の重要な要素として記された。高等学校は、同法第62条において、この規定を読み替えて準用することとされている。

*14）前掲,拙稿（2013）,p.42

*15）前掲,拙稿（2012）,p.94

*16）前原武子は、教育現場の多忙さについて次のように指摘している。「大阪教育文化センター（1996）によれば、大阪の教師を対象に21項目の仕事について、過去1か月間に勤務時間を超えたことがあったかどうかについて尋ねたところ、“授業の準備・教材研究”（74.2%）、“テスト問題の採点・作成”（68.0%）、“職員会議以外の会議・打ち合わせ”（63.6%）、“学校行事の打ち合わせ”（61.3%）などは、半数以上の教師が勤務時間外にも行なった仕事であった。つまり、多くの教師が、本来の勤務時間内では処理できないほどの仕事量に追われているのである」in前原武子『生徒支援の教育心理学』北大路書房（2002）p.51

*17）アメリカ国立訓練研究所（NTL）の提示した学習ピラミッドの概念による。

*18）向山洋一『教師修行十年』明治図書出版（1986）p.171

*19）日本史B第２学期末考査（2012年11月30日実施）において、「地域史を扱った出題に対して、どのようなことを ①感じたか ②新しく知ったか ③やってみようと思ったか」を、理由を添えて自由記述させた。アンケート総数111件（有効アンケート数111件）

*20）平成20年中央教育審議会答申「新しい時代を切り拓く生涯学習の振興方策について」において示された解釈であり、次のように定義づけられている。「『知識基盤社会』の時代において、様々な変化に対応していくために必要な力。狭義の知識や技能のみならず、自ら課題を見付け考える力、柔軟な思考力、身に付けた知識や技能を活用して複雑な課題を解決する力、他者との関係を築く力、豊かな人間性など」

*21）中央教育審議会大学分科会大学教育部会「予測困難な時代において生涯学び続け、主体的に考える力を育成する大学へ（審議まとめ）」（2012.3）においては「生涯学び続け、どんな環境においても『答えのない問題』に最善解を導くことができる能力」の涵養が重要であるとされた。これを受けた文部科学省「大学改革実行プラン」（2012.6）によると、現在、大学入試は大きな転換期を迎えている。すなわち「教科の知識を中心としたペーパーテスト偏重による一発

試験的入試」から、「志願者の意欲・能力・適性等の多面的・総合的な評価に基づく入試」へと大きく転換しようとしている。そこでは「思考力・判断力・知識の活用力等（クリティカルシンキング等）を問う新たな共通テスト」の開発が企図されている。

*22）前掲,拙稿（2012）,p.95

*23）自己有用感（self-esteem）〈自己受容〉と、他者を受け入れる気持ち〈他人受容〉との間に相関関係（相関係数r.=.51）があることは、伊東博がエリザベス・シアラー（Sheerer.E.T.）の研究として紹介している。in伊藤博『カウンセリング入門』誠信書房（1959）p.253f

*24）前原武子はその著書で次のように述べている。「認知スタイルに関しては、もうひとつ重要なことがある。それは教師が自分の認知スタイルを知ることである。人はともすれば、自分の尺度を基準にして他人を見がちである。そうすると、自分とは違うスタイルの児童・生徒の考え方や情報処理のやり方が、劣ったものであるかのように見える可能性がある。しかしそれは、単にスタイル（やり方）の違いかも知れないのである。スタンバーグ（Sternberg,R.J.,1997）も、学校で“できない”と思われている児童・生徒は、単にスタイルが教師と合わないだけのことが多いと指摘している。教師は児童・生徒を見る際に、そのことを念頭におく必要がある」in前掲,前原p.102

*25）石山久男,渡辺賢二編『展望日本歴史２ 歴史教育の現在』東京堂出版（2000）p.2